

日本人の死因3位

肺炎を招く 「誤嚥」の恐怖

⑧

昨日に続いて、東京都目黒区に住む小林佐知子さん(85)のケースを元に、誤嚥性肺炎に対する医学的アプローチを検証する。

小林さんは繰り返し返す誤嚥性肺炎で入院していた大病院を、今年1月に退院。渋谷区にある在宅診療専門クリニック「えびす英クリニック」の松尾英男医師に往診を依頼する。松尾医師は小林さんの家族の強い要請を受け、東京医科歯科大学歯学部(文京区)の戸原玄准教授に往診を要請。その結果、それまですべての栄養補給を胃ろうに頼っていた小林さんは、「昼食のみ」の限定ながらも「口から食べられるようになった。戸原准教授が行うのは、この連載でも紹介してきた「口を限界まで大きく開ける」「頬を膨らませたり閉



左から戸原准教授、小林さん、松尾医師

胃ろうに頼っていた85歳「口で食べる」喜び実感

主治医選びが「人生最大の楽しみ」変える

「小林さんの場合、内視鏡で見ると、わずかながら食べ物が入る。口を大きく開けて、頬を膨らませたり閉じたりを繰り返す(み下す)のための体操の指導だけではない。食べた直後に、鼻から挿入する内視鏡で喉や気管支の状況を見て、嚥下の状況を視覚的に判断する。」

「小林さんの場合、内視鏡で見ると、わずかながら食べ物が入る。口を大きく開けて、頬を膨らませたり閉じたりを繰り返す(み下す)のために、鼻から挿入する内視鏡で喉や気管支の状況を見て、嚥下の状況を視覚的に判断する。」

「小林さんの場合、内視鏡で見ると、わずかながら食べ物が入る。口を大きく開けて、頬を膨らませたり閉じたりを繰り返す(み下す)のために、鼻から挿入する内視鏡で喉や気管支の状況を見て、嚥下の状況を視覚的に判断する。」

「口から食べる」という行為は、人間にとって最大の楽しみであると同時に、高齢者においては「人生を終わらせる危険性」をはらんでいることも事実。その見極めを担う医師の判断はきわめて重要であり、あらためて主治医選びの大切さが浮き彫りになってくる。

小林さんの場合は、往診を担当する松尾医師が家族の要望に耳を傾け、患者を取り巻く環境を総合的に考えて「試してみる価値あり」と判断したからこそ、現状まで回復できたといえる。しかし、この判断は、在宅診療医によって異なるのが実情だ。

戸原准教授のように、在宅で、嚥下機能の回復訓練に取り組む歯科医師は、まだ少ない。だが、松尾医師の持つネットワークの広さが最大限に生かされた結果、小林さんは今、サイコロステーキを食べられるまでに回復したのだ。「在宅診療医のネットワークは、そのまま患者の恩恵に直結する」と松尾医師は話す。

とはいえ、すべての患者に「攻めの治療」が可能とは限らない。小林さんのケースも、家族のサポートがなければ、ここまでの改善はなかっただろう。

「口から食べる」という行為は、人間にとって最大の楽しみであると同時に、高齢者においては「人生を終わらせる危険性」をはらんでいることも事実。その見極めを担う医師の判断はきわめて重要であり、あらためて主治医選びの大切さが浮き彫りになってくる。

(中井広二)